

「お金に愛されないエンジニア」のための新行動論(10)：

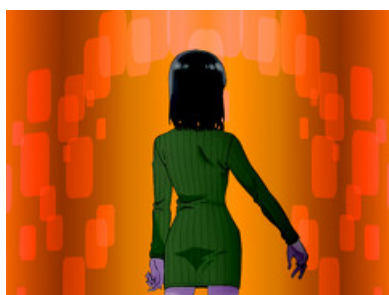
「お金がなくてもそこそこ幸せになれるのか」を宗教と幸福感から真剣に解析してみる

<https://eetimes.itmedia.co.jp/ee/articles/2301/13/news034.html>

今回は、「なぜ、カルトの信者はあんなに幸せそうなのか」という疑問に端を発して、「お金がなくてもそこそこ幸せになれるのか」を宗教と幸福感から真剣に解析してみました。

2023年01月16日 10時30分 更新

[江端智一, EE Times Japan]



今回のテーマは、すばり「お金」です。定年が射程に入ってきた私が、あらためて気づいたのは、「お金がない」という現実でした。2019年には「老後2000万円問題」が物議をかもし、基礎年金問題への根本的な解決も見いだせない中、もはや最後に頼れるのは「自分」しかいません。正直、「英語に愛され」なくても生きていくことはできますが、“お金に愛されない”ことは命に関わります。本シリーズでは、“英語に愛されないエンジニア”が、本気でお金と向き合い、“お金に愛されるエンジニア”を目指します。⇒[連載バックナンバー](#)

信者が幸せに見える

—— 世界統一家庭連合(旧称統一教会)の信者が『幸せ』に見える

という話を嫁さんにしたら、『そんなの、当たり前でしょ』と軽くなされました。「幸せでなければ、今の状況で教団に所属し続けられる訳がない」と、しごく当たり前の意見ももらいました。

旧称統一教会に限らず、いわゆる、カルトといわれている宗教やテロリストにおいては、自力で、その幸せ(という名前の、マインドコントロール)から離れることが絶望的に難しいことはよく知られています。

正直、自力で脱会したケースは「絶無」といっても過言ではありません。これは、教団が外界との接触と徹底的に妨害し、教団以外の人間を全て悪(例:サタン)と信じ込ませているからです。

私の見たところ、信者の奪還に成功したケースは(1)家族の年齢が若く、(2)家族に知性と忍耐と愛があり、(3)説得する時間的な余裕と、(4)(専門家を雇うことができるなど)経済的に余裕のある家族、だけのようです。

ところが、このようなカルトにハマっていく人間は、大抵、上記(1)～(4)と真逆の環境にある家庭の人間が多いです—— というか、家庭や社会に希望がなければ、そりゃ、行きつく先は「宗教」くらいしかない、とも思います。

—— と、ここまでは、結構、誰もが語っている話です。

ところが、カルト宗教の信者の視点から見える世界を、ちゃんと説明している人はいません。そこで、今回、私は、カルトの人の心の内をちゃんと理解して、それを多くの人に納得してもらう方法を考え、一つの方法論を思い付きました。—— 名付けて、「コペルニクス的逆展開パラダイム」です。

まず、「今の私たちの世界の常識」を前提とします。具体的には、以下の通りです。

(1) 地球は球体であり、太陽を中心として回転する惑星の一つであり、太陽系は銀河系を構成する一つにすぎず、そして、宇宙には銀河系以外の星雲系が数えきれない程存在する

(2) 特に地球が球体であることは、(宇宙開発の)ニュースやドキュメンタリー、海外旅行、物理方程式、または、GPSの利用などから、その事実を主張する必要がない

さて、ここで、この上記(1)(2)に対して、ある日、突然、「地球は平面である」ということが世界の常識に変化してしまったとします。それは、地球が平面であることが、(新しい)物理方程式でも成り立ち、自然現象としても確認され、その世界「地球が平面である」という事実として矛盾なく存在してしまう世界です。

すると、次のようなことが起こります。

家族からは、「なんで、地球が球体である、なんて妙なことを言い出すの?」「科学的にも、ちゃんと証明されていることなのだよ」と泣きつかれ、世間からは「あいつ(江端)って、気持ち悪い奴だよな」「関わらないでおこう」と言われて、世間から避けられています。

しかし、その世界には、「地球は球体である」ということを、きちんと説明してくれる **サークル**がありました。そのサークルは、理性的に自然現象を把握し、その世界の物理法則の運用の間違いを論理的に立証する活動を行っているサークルです。当然、私(江端)は、そのサークルに所属することになります。

そして、そのサークルは世間から**カルト**と呼ばれていました。

さて、ここで、皆さんに問いましょう ― 以下のどれが、江端にとっての「幸せ」でしょうか?

- (A) 地球は球体であると信じ続けて、サークルの中で活動続ける
- (B) 世界は平面であると考え直して、自分の考えを修正する
- (C) 地球は球体であるが、それを黙って、世間に迎合して生きていく

江端にとっての幸せは(A)の一択です。「地球が平面だあ? バカ言ってんじゃねーぞ!」と叫び、地球が球体であることを、駅前でプレゼンテーション(辻説法)するでしょう。しかし、通勤や通学している人からは、無視され、気持ち悪がられ、石を投げつけられたりするかもしれません。

カルト教の信者も同じこと言うと思います「教祖が間違っているですって? バカ言ってんじゃないわよ!」と叫び、教祖の解く世界の真実を、駅前でプレゼンテーション(辻説法)するでしょう(以下省略)。



カルトの信者のマインドを理解する方法論

「『地球は平面なんだよ』と、あなたが、家族から説得されている状況をイメージしてみましょう

観点	江端(の主張)	カルト教団
信念	『地球は球体であり、太陽を中心に回っていて、これは絶対的な事実である』	『教祖はキリスト教の最後のメシアであり、その教えは絶対的な真実である』
活動	地球が球体であることを説明する為、理論、数式、観測を繰り返す	教祖の描く救済された世界を説明する為に、布教活動や、法額な寄付を繰り返す
モチベーション	世界の人々に真実を教え、真の幸福の世界に至るための、献身的な活動	
絶望	人類の真の幸福の為の活動を、無知な人間達が法律や制度や裁判で妨害を続けている	

“真実”を知っているのは教団の私たちだけで、それ以外は、無知な大衆または悪魔(サタン)

□

さて、ここで、再度「幸せ」について考えてみたいと思います。

幸せとは、

- (A) 科学的／数学的に示された矛盾のない状態を、客観的に認知することなのか
- (B) それとも、主観的／直感的に感じたものを、ロジック無視で主観的に感じるものなのか
- (C) あるいは、前記(A)(B)とか関係なく、脳がドーパミンを大量に発生させ、幸せを感じられる状態であるのか、
- などと考え出せばキリがありません。

ただ、一言だけ言えそうなことは、退職後の私が、今以上に幸せでい続けるのは、直感的に「無理」ではないか、ということです。

第1に「身体的な老化」です。基本スペックの低下が甚だしいです。視力、聴力、記憶、思考力、また体力もなくなっていくのも感じます。

第2に「気力の低下」です。以前の私であれば、トライアンドエラーを何度でも繰り返してうまくいくまで続ける、などということ平気でやったものですが、最近の私は、「最短距離でゴールに到着したい」と思うようになりました。

そして、今後予想される問題は、「交友関係の断絶」です。私は、今でも友達はいませんので、このまま退職すれば、義務的な人間関係は全滅します。このような利害関係の消滅は、人間関係をも簡単に悪化させるだろう(特に私の場合は)と予想できます。

加えて、困ったことに、私は、「人間があまり好きではない」ようなのです。——自分では良く分からないのですが、家族がそう言っているから多分そうなのだと思いますし、自分でも心当たりはあります([筆者のブログ](#))。

とまあ、このように、私の老後は、あまり見通しが明るくないです。

お金がなくても、そこそこ幸せになれる方法はないのか

こんにちは、江端智一です。

今回は、お金に愛されないエンジニアである私が、「お金がなくても、そこそこ幸せになれる方法はないか」、という観点から考えてみました。

そもそも、私は、『お金が大好き』というわけではありません。私にとって、お金はツール（道具）です。前述の通り、『私の老後はあまり明るくない』という不安があるからこそ、その不安を払拭するために、ツールを準備しておきたいというモチベーションで、この連載の最初の方は、投資やら年金やらを調べていたのです。

しかし、私としては、その不安を払拭するものが、お金以外のツールであっても全く構いません。ただ私は、お金以外のツールが思い付かないのです。

そのような状況で、私がふと思ったことが、「なぜ、世界統一家庭連合（旧称統一教会）の信者は、あんなに『幸せ』そうに見えるのか？」ということです。—— はっきり言えば、「なぜ、あんなにも世間とズレていて、自信タツプリにしているのか？」という素朴な疑問です。

高額献金、靈感商法、詐欺的教団勧誘、出産前養子縁組（[筆者のブログ](#)）、2世信者問題。—— どう考えても、反社会的で反道徳的としか思われない行為のラインアップと言えましょう。

それ以外でも、地下鉄サリン事件で27人を殺害したオウム真理教は、テロの計画と実行を行った集団の幹部13人の死刑が執行された後も、後継の「アレフ」「ひかりの輪」で、絶賛活動継続中です。—— はっきり言って私には、理解不能で不快です。

この話をすると、『ヤツらは「幸せ」なんだよ、ヤツらなりに』と、一言で片付けられますが、私は納得できません。

もし、『ヤツらが「幸せ」』が肯定されるのであれば、品行方正（私（江端）のことです）で、遵法精神にあふれ（私のことです）、社会の不正に怒り（私のことです）、ロジックと数字で世界の真実に近づこうとする市井のサラリーマン研究員（私のことです）が、老後の不安におびえ、「幸せ」を実感できないとは、ということなのか？

私は納得できないのです。皆さんだって、そう思いませんか？ あんな奴らが幸せで、私たち善良な市民が不幸せであるというのは、どう考えても理不尽としか思えません。

そこで、今回私は、私自身を説得するために、「幸せ」とは何かについて、最新の研究を調べまくってみました。今回は、そのお話をしたいと思います。

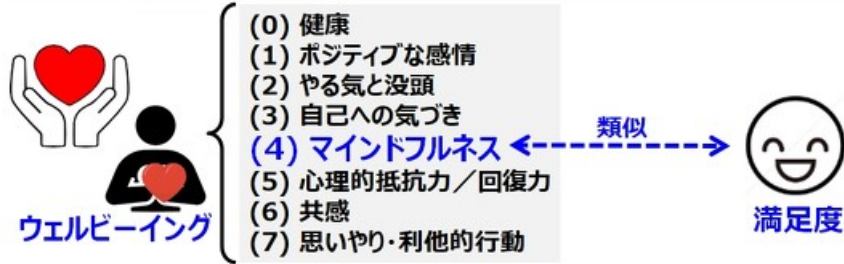
最近よく聞く「ウェルビーイング」って何？

最近、「ウェルビーイング (Well-Being)」という用語が頻繁に登場するようになりました。これは「ハピネス (Happiness: 幸福)」とか、「サティスファクション (Satisfaction: 満足)」とは、少々異なった概念です。

今回のテーマで使う用語

ウェルビーイングって何？

用語	概要
健康	「健康とは、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であり、単に病気や虚弱でないことを意味するものではない」
ウェルビーイング	身体的、精神的、社会的な生活のあらゆる面で幸福で満たされた状態
満足度	自分の願い、期待、または必要を満たすこと、またはそれによって得られる喜び



トータルな人生の幸福の概念

ウェルビーイングは、「人生における総合的な幸せ（というか、『良い状態』）が継続している状態」というイメージです。一方、ハピネスというのは、「感情的かつ一時的に発生した正の感情」、という感じです。これに対して、サティスファクションというのは、「不平不満のない状態」であり、ウェルビーイングの一つの要素と言えます。

さて、ウェルビーイングもハピネスも、日本語では「幸福感／幸福」と翻訳されます。

そこで今回のコラムでは、「身体的、精神的、社会的に幸福で満たされた状態が継続するもの」である「ウェルビーイング」を、「幸福感」と訳して取り扱うものとします。

今回、引用させて頂いた資料は、“Subjective well-being related to satisfaction with daily travel（日常的な移動の満足度に関連する主観的な幸福感）”（[参照](#)）です。

人は自分の幸／不幸を「自分で勝手に」決めている!?

さて、内容の検討に入る前に、この論文で頻用されている用語、“Subjective Well-Being（主観的幸福感）”について説明したいと思います。

客観的幸福感と主観的幸福感

幸福感の“尺度”には2種類ある・らしい

尺度	定義	判断基準
Objective Well-Being 客観的幸福感	脳波などの生理学的指標で、幸福を計測する	外部的に定められた基準で、幸福か否かを判断する
Subjective Well-Being 主観的幸福感	包括的な自己評価で、個人が判断する	アンケート等を用いて、幸福か否かを判断する

一般的に使われている幸福は、主観的幸福感

幸福感と呼ばれているものは、学術的には2種類あって、「客観的」なものと「主観的」なもので分けられています。脳波やドーパミンの分泌量で、定量的に測定するものが「客観的幸福感(Objective Well-Being)」であり、幸福を個人の主観のみで決定する幸福感が「主観的幸福感(Subjective Well-Being : SWB)」です。

よくよく考えると、私たちが「幸せ」と呼んでいるもののほとんどが「主観的幸福感」です。私たちは、自分たちの幸せを考える時、定義が記載された紙や、数値が記載された表(右図のような標準偏差値表みたいな)を持ってきて、電卓で計算するようなことはしません。

「主観的幸福感」の考え方のスゴいところは、客観的基準を全て却下する、という恐ろしい腹のくくり方にあります。

そして、さらに、この主観的幸福感は、さらに2つのカテゴリーに分類されます。(A) 認知的幸福感(Cognitive Well-Being)と、(B) 感情的幸福感(Affective Well-Being)です。

年齢	性別	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値
0	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
0.1	0.00017	0.00020	0.00020	0.00020	0.00020
0.2	0.00034	0.00040	0.00040	0.00040	0.00040
0.3	0.00051	0.00060	0.00060	0.00060	0.00060
0.4	0.00068	0.00080	0.00080	0.00080	0.00080
0.5	0.00085	0.00100	0.00100	0.00100	0.00100
0.6	0.00102	0.00120	0.00120	0.00120	0.00120
0.7	0.00119	0.00140	0.00140	0.00140	0.00140
0.8	0.00136	0.00160	0.00160	0.00160	0.00160
0.9	0.00153	0.00180	0.00180	0.00180	0.00180
1.0	0.00170	0.00200	0.00200	0.00200	0.00200
1.1	0.00187	0.00220	0.00220	0.00220	0.00220
1.2	0.00204	0.00240	0.00240	0.00240	0.00240
1.3	0.00221	0.00260	0.00260	0.00260	0.00260
1.4	0.00238	0.00280	0.00280	0.00280	0.00280
1.5	0.00255	0.00300	0.00300	0.00300	0.00300
1.6	0.00272	0.00320	0.00320	0.00320	0.00320
1.7	0.00289	0.00340	0.00340	0.00340	0.00340
1.8	0.00306	0.00360	0.00360	0.00360	0.00360
1.9	0.00323	0.00380	0.00380	0.00380	0.00380
2.0	0.00340	0.00400	0.00400	0.00400	0.00400
2.1	0.00357	0.00420	0.00420	0.00420	0.00420
2.2	0.00374	0.00440	0.00440	0.00440	0.00440

2つの主観的幸福感

「主観的幸福感は自分で決めるもの」であるが、
その“決め方”がちょっと違う

用語	定義	江端解釈
主観的幸福感	“幸福とは何か”を一切問わない→いかなる定義も採用しない	比較対象がなく、数値データもない → 客観的なものは、何一つない
(A) 認知的幸福感	個人が(勝手に)持っている基準に基づき、(勝手に)比較して判断する自己評価	自分の中で勝手に作り上げた「自分幸福ルール」に基づいて判断した「自分だけの幸福」
(B) 感情的幸福感	喜び、充足感、楽しさなどの肯定的感情 悲しみ、怒り、失望などの、否定的感情 上記以外の説明できない感情	上記の「自分幸福ルール」すらなく、「非論理的に、かつ、自然発生した感情に基づく幸福」

「(A)自作ルール」と「(B)ルール不在」の2つ

まあ、(B)の方は、「非論理的」で「自然発生した」、マイナスの感情や、それ以外の複雑な感情も含めたハピネス、という理解で大丈夫だと思います。

しかし、(A)の認知的幸福感の概念は — 正直、私に衝撃を与えました。

私、主観的幸福感には、「いかなるルールも基準もない」と記載しました — で、それは正しいのですが、「自分が主観的(勝手に)に決めたルールや基準は、自分の中でガッツリ存在している」のです。

その自分ルールの例を上げてみましょう。「モテる／モテない」「夫の収入が多い／少ない」「自分の仕事が大変／ラク」「メイクがうまい／へた」「自分より若い／若くない」「彼氏がいる／いない」「自分の子供の学校のランク」「SNSの”いいね”の数」「スピリチュアルなアドバイスをする」「所持しているブランド品」から、「学歴」「収入」「持ち家」などなど — ひとことと言えば、他人と自分との間でマウントのネタとなる項目が、「主観的ルールまたは基準」ということです。

例えば、私の場合、「メイクのうまい／へた」は、「江端主観的ルールまたは基準」の項目として死ぬまでエントリーされることはないでしょうが、「TOEICスコア」についてはこれからもエントリーされ続けると思います。そして、死ぬまでその項目が消去されることはないでしょう。

ところが、「TOEIC」というテストの存在を知らない人にとっては、当然、それは、その人の認知的幸福感(Cognitive Well-Being)にとって、プラス側にもマイナス側にも、全く影響を与えないのです。

つまり — 自分の幸福感(の中の、認知的幸福感)を決定しているのは、「自分オリジナルの主観的ルールまたは基準」を作っている自分自身であると、という冷然たる事実なのです。

ならば、主観的幸福感とは、どのように測定するものか？

その一つに、生活満足度(Satisfaction with Life Scale : SWLS)による測定方法があるようです。これは、「日々の生活に満足していること = 主観的(認知的)幸福度が高い」という観点からアンケートで測定する、というものです。

主観的(認知)幸福と、生活満足度の関係

『ボロを着てても、心は錦(にしき)』
と本当に言えるか？ を —— 統計的に追いつめた

#	生活満足度尺度 (SWLS)
1	私の人生は、私の理想に近い
2	人生のコンディションは上々
3	自分の人生に満足している
4	これまで人生で、私は大切なことを達成した
5	もう一度人生をやり直せるなら、ほとんど何も変えない

項目間相関は0.54から0.79の範囲

(*) 一連の項目がグループとしてどれだけ密接に関連しているかを示す指標



『ボロを着ている』自分を、
自分がどう評価するかで、決まる

アンケートの内容を見て頂けると分かると思うのですが、確かに「他人との比較」がどこにも出てこないのです。アンケートの主語は、いずれも「自分の人生」になっています。

なるほど、これは、明らかに「主観的な幸せ」であり、かつ、このアンケート内容であれば、数値で算出することもできます（実際には、それぞれの質問に対して、5段階（1、2、…5）で回答するようです）。

ただ、正直に言って、確かに、質問の中に、比較すべき「他人」や「社会」は入っていないのですが、この質問に対して完全に"Yes"と答える奴は —— 入院レベルの「躁(そう)病(*)」を疑うべきではないか、とも思います。

*) 躁うつ病において、気分が異常に高揚し、夜も眠らずに、支離滅裂な言動を発し、危険を顧みなくなるような状態になる期間のこと

身もフタもない結論だった！「幸せ」に関する研究結果

この主観的幸福について、引用文献で引用されていた論文のサマリーをいくつか紹介します（江端の超要約ですが）。

主観的幸福に関する興味深い研究結果

主観的幸福=SWB: Subjective Well Being

#	論文の結論	江端の超要約
1	感情的SWBと認知的SWBはともに安定的であり、おそらく遺伝的な影響を受けている	生まれつきの性格で、幸福が決まる
2	目標達成度、生活環境が良い、収入が高いほどSWBが高い	目的意識、生活水準、収入で、幸福が決まる
3	SWBは時間の経過とともに所得の増加に比例して増加するわけではない	収入と幸福は正比例しない
4	SWBは通常、年齢とU字型の関係をもち、40歳前後で最も低く、その後徐々に増加する	40歳は、不幸せのどん底
5	結婚はSWBを増加させるが、離婚や配偶者の死はSWBを減少させる傾向がある	結婚は幸せで、離婚や死別は不幸せ
6	失業は、特に社会的支援が少ない場合、SWBを低下させることが示されている	社会がちゃんとしていれば、「失業=不幸」とはならない
7	ある研究では、女性は男性よりもSWBが高く、ある研究では差がなく、さらにある研究では、性差はライフパターンによって異なるといっている	女性は男性より幸せ

採択論文から引用した、信用できる内容

どうです、この身もフタもない結論の数々。ちなみに、これらの結果は、全てアンケート結果に基づいており、統計学的に有意と見なされた結論から導かれ、きちんとした審査を経て採択された論文の内容です。

#1のように、「生まれつきの気質(遺伝)で幸福／不幸が決まる」、という話は、昔、私が友人に言われたフレーズ『江端って、どうしていつもそんなに幸せ(能天気)なの?』という、誠に失礼な質問を思い起こさせました。

#7の、「女性は男性より幸せ」については、論文の著者自身も、『条件を変えたら結果が変わるかもしれない』と逃げを打っているようです。ただ、この件について、嫁さんとトークをしたのですが、『ある面では真実かも』とも言われました。

嫁さん:『女性には、化粧、服、靴など、女性を直接的に幸せな気分させる”モノ(有体物)”は多いように思う。比して、男性の幸せは、権力とか地位とか学位のような『見える化』できないものが多くて、そのスパン(期間)も長く、手に入れられる可能性も(化粧や服や靴と比べれば)圧倒的に低いと思う』

—— だそうです。

また、#4の「40歳は不幸のどん底」という結果は、なかなか興味深いです。確かに、この時期に、人生の面倒くさいことが、一気にやってくる気がします(育児、(子どもの)受験、出世、リストラ、離婚……)。しかし、逆に言えば、40歳を越えれば、その面倒くさいトンネルから抜けられる、という明るい見方もできると思います。

さて、今回引用した論文は、さまざまなタイプの幸福やら満足やらが登場してきて、私自身も混乱していますので、ここから先は、以下のアイコンを使って説明を続けたいと思います。

今回のテーマで使うアイコン

文字で説明するのが面倒くさい難しいから

用語	アイコン	用語	アイコン
パフォーマンス満足度		認知的SWB	
毎日の移動の満足度		感情的SWB	
日常生活の満足度		喜び、充実感、楽しさ	
屋外での活動		悲しみ、怒り、失望	

『大切なものは目には見えない』は数値で導き出されていた

さて、ここからが本論です。人間関係が絶望的に希薄な私は、定年退職後に社会的に孤立することは、ほぼ確定です。普通、そのような自分の未来をシミュレーションすることは難しいです。しかし、今回、私は、人類史上、非常にレアなケースに直面することができたのです。―― コロナ禍です。

私たちは、ウイルス感染防止のために、強制的に物理的な交流を断ち切られた世界を、この目で見えるチャンスを得ることができました。コロナ禍がもたらした影響については、「[「新しい資本主義」をエンジニア視点で考えてみる](#)」で持論を展開していますので、興味のある方はご一読ください。

今回は、引用論文の内容の中でも、特に「屋外活動」に関して考えてみたいと思います。

まず、屋外活動が、主観的幸福度に「影響」を与えていることについては、議論の余地はないようです。

屋外活動は幸せか？

屋外での活動が、主観的幸福に“影響”しているか？

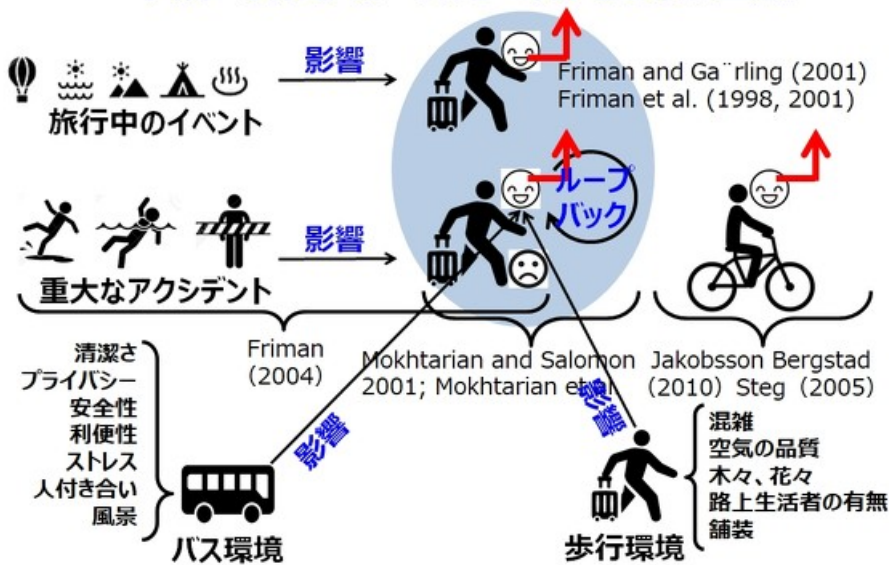


屋外での活動が、幸せに“影響”することは、議論の余地なし

ただ、単なる屋外活動では足りない、ということも分かっています。屋外活動が人間に満足を与えるためには、屋外活動の中に、さまざまな要件が入っていることが必要なのです。

屋外での活動と満足度の関係(1)

“幸福”ではなく、“満足”であることに注意



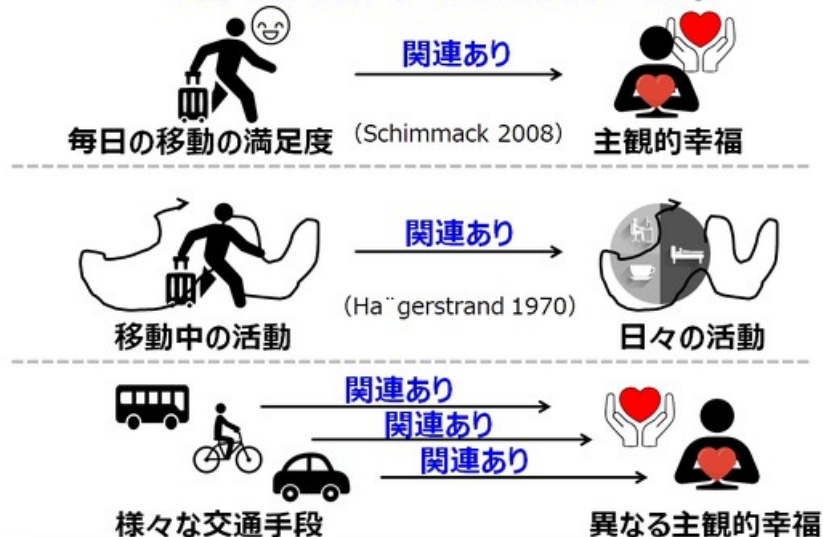
旅行の目的(キャンプなどのイベント)は正の影響を与えますし、アクシデントは負の影響を与えます。またバスの移動一つとっても、清潔さやプライバシー、風景によっても影響度は変わりますし、さらには、歩行ですら、混雑、空気、歩行途中で目にするものなどで、影響されることが分かっています。

ただ、ここでは単なる「満足」を調べているのであって、「主観的幸福度」との関係にまで至っていません。

ですが、次の研究結果では、満足が連続される状態が続くことで、主観的幸福度を高める、との結論に至っています。

屋外での活動と満足度の関係(2)

毎日の移動が、満足を積み重ねる



「ある種」の屋外活動が、主観的幸福と関連があるのも事実

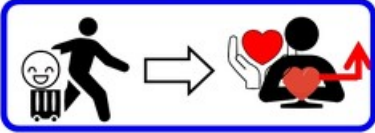
と、ここまでの、既往研究についてのザックリした説明になります。

さて、この論文を作成した著者の目的は、「外出さえすれば、それだけで本当に幸せになれるの?」という問いかけです。著者は、「外出といったって、その内容によっては、幸せにならないケースだってあるんじゃないの?」というテーゼを掲げて、調査に乗り出しています。

外出すれば幸せになれるのか？

外出は、本当に私たちが幸せにしているのか？

(1) 日常の移動は、主観的幸福を増やすか？



(2) 自家用車の、感情的な利用と、義務的な利用、どちらが主観的幸福を増やすのか？



日常的な移動と、自家用車による移動についての研究

著者は、日常的な移動(外出)の内容を分類化し、その上での「満足」と「幸福」を調べる試みをしています。

特に、自家用車の利用については「感情的な利用(レジャー、映画、外食目的など)」と「義務的な利用(子供の学校や塾の送り迎え、通勤など)」について、1330人のアンケート結果を使って分析を行っています。

外出すれば幸せになれるのか？(2)

相関を調べてみたら、意外なことが分かってきた

#	Item	1	2	3	4	5	6
1	認知的幸福						
2	感情的幸福	0.64					
3	1週間の気分	0.56	0.68				
4	移動の満足度	0.37	0.48	0.55			
5	活動の満足度	0.24	0.20	0.22	0.26		
6	自家用車の所持	0.15	0.08	0.08	0.02	0.01	
7	自家用車の週間利用率	0.06	-0.02	0.03	-0.06	0.08	0.47

自家用車の所持は、“満足”には貢献しないが、“幸せ”には貢献している

上記の表は、それぞれの項目間の相関を示しています。値が大きいほど相関が強くなり、マイナスは逆の相関になっていることを示しています。

結論を3つのフレーズでまとめると、

(A) 義務的な外出は、“満足”や“幸せ”どころか、“苦痛”ですらある

(B) 自家用車を所持していることは、“満足”と関係がない

(C) (しかしながら) 自動車を所持していることは、“認知的幸福”と強い関係がある

となります。

つまり、——（自家用車の所持は）“満足”を満たさないが、“幸せ（認知的幸福感）”に貢献している、という結論になります。

これは、哲学的アポリア（難問）の一つでもあり、あるいは、サン・テグジュペリ先生の「星の王子さま」の超有名なセリフでもある、『大切なものは目には見えない』を、数値と解析で導出した稀有な事例である、と実感しました。

では、今回参照したこの論文の結論をまとめたいと思います。

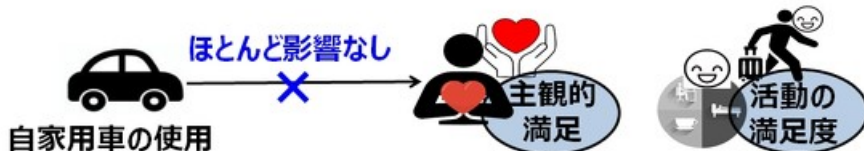
外出すれば幸せになれるのか？(3)

ざっくりまとめると、こんな感じかな

(1) 移動の満足度がアップ → 活動の満足度がアップ
→ 主観的幸福もアップ



(2) 自家用車の使用 → “満足”も“幸福”もアップしない



外出が幸せにつながるかは、ケースバイケース

つまり

(A) 外出が、幸せに貢献していることは間違いないが、その一方、

(B) 外出の道具（自家用車）の使用が満足をもたらしているとも言えない。しかしながら、

(C) 自家用車が人生の幸福度を上げているのは間違いない、

ということになります。

これらを乱暴にまとめると、「非日常的な外出アクティビティーを、継続すること」が、人生の幸せに貢献する、ということ間違いなさそうです。

そして、私が、今の私や未来の私に贈るメッセージとしては、「身体的老化だの、気力の低下だの、交友関係の消滅だの」と、

—— 先走っていろいろ考えないで、まずは家の外に出ろ。そして何かやれ。そんでもってそれを続けろ

ということなのかなあ、と思っています。

私に関して言えば、「ラクラク隠居」などという似合わない老後設計でなく、「退職後、どんな職種の仕事であれ受け入れて、体が動く限り働き続ける」ことが、最も簡単な老後の幸せの獲得方法である、と理解しました。

なぜ、カルトの信者はあんなに幸せそうなのか

さて、ここからは、冒頭の私のテーゼ「なぜ、カルトの信者はあんなに幸せそうなのか?」「なぜ、あれほど世間からズレていても、自信タツプリにしていられるのか?」について検討してみたいと思います。

ここからは、論文「[人は宗教で幸せになれるのか](#)」の内容をレビューしながら、私なりに検討させていただきます。

まず、さまざまな宗教を、「宗教」という一つ概念でまとめることには無理があるようです。ここをちゃんと整理しておかなければ、カルトの本質を見失うことになるからです。

宗教の分類

ひとくくりでまとめると説明しにくいので、簡単に分類

カテゴリ	重視するポイント	イメージ
仏教、ヒンズー教	生活・習慣・道徳	日常生活の基盤
イスラム教、ユダヤ教	世俗・慣習法+共同体	政治・制度の基盤
カトリックキリスト教、正教	祭礼・儀式・慣習	形式orイベント重視
プロテスタントキリスト教	信仰内容/グループ	仲良しグループだが、異なるグループ間 は非干渉

いわゆる“カルト”は、プロテスタントキリスト教系のグループに近い

仏教やヒンズー教は宗教ではあるのですが、超越者（神さま、仏さま）への熱心な傾倒というよりは、その国の国民の生活、習慣、道徳にゆるやかに溶け込んで、日常生活の基盤として、無意識的に機能しているものです ―― いわゆる日本人タイプ、と言えると多いです。

比して、イスラム教やユダヤ教は、政教分離どころか、政教一致として、宗教が法律として機能するケースが多いです。法律を作る主体が、国民（の代表者）ではなくて、経典の中の神さま、と理解すればO.K.です。

私がパッと思い付くだけでも、サウジアラビア、イラン、アフガニスタン（タリバン）などがあり ―― 特に、イスラム教の中でも原理主義的な考え方を政策としている国は、女性の人権（教育、就労、その他）が徹底的に踏みにじられていることで有名です（そうでない国もあります）。

また、カトリックキリスト教や正教は、形式主義が強く表れている感じです ―― 言わば“茶道”みたいな感じでしょうか。『型（基本形）から入ることで、真理（神）に近づく』、という感じでは、武道（空手とか合気道）の精神にも近いように思えます*）。ローマ教皇を選出するコンクラーベ（conclave）という選挙制度も、この“型”の一例に見えます。

*) ちなみに私、合気道5級（×段）です。

これらに対して、プロテスタントキリスト教は、ちょっと独特です ―― 独特といっても、世界で5億人ともいわれる人口を有しているのでメジャーな宗教ではありますが、その出自が独特なのです。

カトリックキリスト教に”蹴り”を入れて分派したという歴史的経緯（ルターの宗教改革）もあり、その精神は**独立自尊**にあるといっても良いでしょう。いわゆる新興宗教、または、カルト系の宗教は、その精神が先鋭化されたもの、と見なすことができます。

カルト系の宗教団体は、おおざっぱに言えば”大学のサークル”でしょうか。生活・習慣、法律、祭礼・儀式などに拘束されることなく、基本的にはフリーダム。

とはいえ、100%オリジナルというわけでもなく、既存の大手宗教をベースとして、(A)勝手な教義の改修をしてしまうこと、(B)自分が救世主であるという主張をすること、が特徴と言えます。さらに(C)教団を大きく豊かにし、批判者を廃除するためには、不道德どころか非合法の手段をも平気で行使することは、旧称統一教会やオウム真理教の事件を調べれば、明らかです。

さて、これらを踏まえた上で、前述した図を使って、宗教の中でも、特にカルト宗教団体におけるウェルビーイングについて、適合度を調べてみました。

カルト宗教のウェルビーイングの特徴

いわゆる「カルト」の信者のマインド



「カルト」は『ウェルビーイング製造システム』

うん — 怖いぐらいの適合度。

はっきり言って、カルト宗教は、ウェルビーイング製造システムといっても過言ではない、と言えます。手っ取り早く幸せになりたいなら、宗教はお勧めです。その中でも「洗脳がメインのサービスメニュー」となっているカルト宗教は、とってもお手軽に”幸せ”を入手できそうです。

そんなことはない — と、反論したい方が多いと思います（正直、私も反論したい）が、もう一度繰り返し申し上げますが、自分の幸福感（の中の、認知的幸福感）を決定している”モノ”は、「自分オリジナルの主観的ルールまたは基準」を作っている自分自身である、という冷然たる事実です。

つまり、カルトの外部からの客観的な批判や非難は、かれらの幸福度に1mm足りとも傷をつけないのです。

私財の全額献金が、たとえ彼らの生活インフラ（子供の養育費や教育費を含む）を破壊しようとも、死後に神の国に生まれ変わることを考えれば、費用対効果は無量大といっても良いでしょう。生前養子契約が教祖の御心に沿うのであれば、子供の人権などささいな話です。なぜなら、その子供も神の国に生まれることができるのですから。

勉強や仕事で悩むこともなく、面倒な人間関係にわずらわされることもなく、現世の複雑な社会システムに適用する努力も投げ出し、ただ、教祖の言われるままに、祈って、修行して、献金するだけで、未来の（または来世の）幸せが担保される — そのためであれば、自分以外、または、信者以外の人がどうなるうが、知ったことか — うん、非常に分かりやすい”ウェルビーイング”です。

ただ、一つだけ気になるのが、カルト宗教団体と実世界とのインタフェースとコミュニケーションです。旧称統一教会が60万人ですが、(解散命令前の)オウム真理教に至っては、一番多い時でもたかだか1万5000人程度です。現実世界と離れて生きていけるほどの、信者数ではありません。

とすれば、カルト宗教団体は、信者と現実世界の人間とのコミュニケーションを徹底的に妨害するか破壊するしかありません ―― しかし、それを現実に実施しているようです(例えば「[改訂新版 統一教会とは何か](#)」)。

宗教とウェルビーイング

さて、この話を、カルト宗教に特化して論じるのは、私の本意ではありません。ここは、宗教一般についてのウェルビーイングについても、いろいろと論じてみたいと思います。

宗教のウェルビーイングの特徴

約30件の論文のアンケート集計を解析した結果

カテゴリ	タイプ
健康・収入との関係	宗教活動(参加、信念、人間関係)との間には、関係はない
幸福感を感じやすい世代	中高年に多い
幸福感を感じやすい人間	喪失体験者(離別死、病気、失業)に多い
幸福感を高めやすい人間	出席率が高い、活動に熱心→信者同士の関係や自尊心が強化

宗教が幸福感を高める(ことがある)のは事実

ただ、宗教におけるウェルビーイングは、信仰心によってもたらされるものもありますが、日々の生活の中で発生したウェルビーイングの欠損を補う(親しい人の喪失感をやわらげる、など)、という役割もあるようです。

また、宗教によって幸福感を感じやすい人が、中高年に多いというのは、実は逆で、中高年になると宗教に興味を持ち出す人が多くなるからではないか、と考えています。

若い方には分からないと思いますが、親の死などの他に、同世代の芸能人の逝去が「立て続けに」報じられると、『自分もカウントダウンに入った』ことを実感できるようになるものです。

では次に、東アジア(日本を含む)宗教のウェルビーイングの特徴を挙げてみます。

東アジアの宗教のウェルビーイングの特徴

どのような関わり合いが、いちばん幸せなのか？

カテゴリ	タイプ
のめり込み方	無関心 or 徹底的にやる人 → ストレス感↓
	ほどほどにやる人 → ストレス感↑
仏壇、神棚の有無	仏壇を所持し、墓参り頻繁 → ストレス感↑
	神棚を所持 → ストレス感↓
宗教への思い込み	「先祖は崇拝すべき」「神仏は実在」→ ストレス感↑
宗教観の自己認識	ほどほど→ ストレス感↑↑↑↑ / 熱心 → ↑↑↑ / 無神論↑↑ / 儀式のみ ↑ / 無関心

日本においては、“いい加減”が“いい”らしい

東アジアにおいては、日本以外の国においても、宗教がその国の国民の生活、習慣、道徳にゆるやかに溶け込んで、日常生活の基盤として、無意識的に機能している、という傾向があるようです。

まあ、一言で言えば — 真剣に信仰活動すると疲れる(ストレスがたまる)ということのようです(「不幸せ」になるわけではないようですが)。「苦しい時の神頼み」ということわざは、多分、1日5回も神に祈りをささげる習慣のある国(宗教)では、とんでもない不道德でしょう。

また、日本では、「信仰心が厚い人ほど尊敬される」という文化はないようです。それについて、日米で比較したものが、次の表になります。

日米における宗教のウェルビーイングの比較

幸福感からみた日米比較

カテゴリ	米国	日本
幸福の優先度は？	婚姻→格差→ 宗教→学歴	格差→婚姻→性別 (“宗教”がない)
幸福なのは、どっち？	信仰者	非信仰者 無関心者
神を人格と考えると？	幸福感↑	
神を原理(ルール)と考えると？	幸福感↓	

宗教に関する世界観が、全く異なる

米国では、宗教が幸福を構成する要素の一つに入っていますが、日本では、そもそも、項目として入っていませんし、信仰者は幸福である、という考えすらありません。

その一方で、ちょっと興味深いのが、「神さま」の把握の仕方については、双方共通であるという点です。

日本も米国も、「神さま」を、人間と同じ形をし、人間と同じ思考形態を持つ超越者と見なすことで、幸福感を高めている

ということです。神さまを「裁判所」や「人間を審判する装置」と見てしまうと、「気持ちが萎(な)える」ようです。

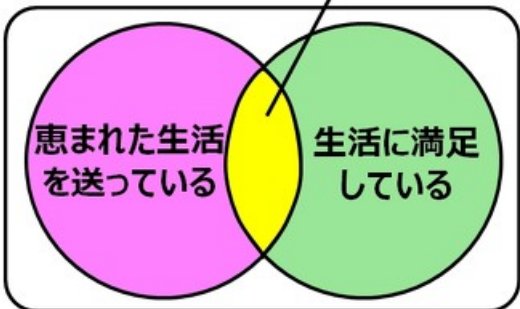
さて、ここまでは、宗教が与えてくれるウェルビーイングの話でしたが、そもそも、ウェルビーイングの観点から、宗教は、どのような客層(信者)をターゲットとするのかを調べてみました。

宗教のウェルビーイングのターゲット

宗教は、「誰」の幸福感を増やそうとしてきたのか？

カテゴリ	内容
基本原則	恵まれた生活を送り、それに満足している人が、 熱心な宗教者になることは稀(まれ)

ここに熱心な宗教者は登場しない



宗教が積極的に影響を与える3人

対象となる人間	宗教の役割
(1)生活が良好なのに、満足していない人	自分が恵まれていることに、気づかせること
(2)生活が不満足だが、それを受け入れている人	功德を詰むことで、“来世”に期待を持たせること
(3)生活が不満足で、それを受け入れていない人	行動(“テロリズム”を含む)で現状打破に導くこと

カルト宗教によるテロも、宗教の機能の一つ

宗教の信者になることは比較的簡単ですが、恵まれた生活を送り、かつ、それに満足している人が、熱心な信者になることは、レアケースなのです。

そもそも、そのような人は、宗教と無関係に良好なウェルビーイングを持っているはず。それゆえ、良好なウェルビーイングを持っていなかった人が、それを宗教活動で担保したい(穴埋めしたい)と考えて行動することは、自然な行為だと思います。

そのような、良好なウェルビーイングを持っていない人に対する宗教の役割は上記に記載したように、「自分のウェルビーイングに気付かせる」ことや、「他利的行為(ボランティア)などで、ウェルビーイングを良い状態に導く」などもあります。

宗教は運命的に「テロを作り出す」？

しかし、それ以外にも、自分の信じる宗教の世界を、力づくで実現させるモチベーションを与えるのも、また宗教の(ネガティブな)機能の一つなのです。―― “テロリズム”です。そして、ここに登場してくるのが、いわゆる「カルト」なのです。

宗教テロというと、近年では、IS(イスラミック・ステイツ)などが真っ先に想起されます(最近では、ISがアフガニスタンのタリ

バンを標的にテロをしているなど、もう、訳が分かりません）が、国内だって、宗教テロはありました。

宗教のウェルビーイングの負の側面

「他者の幸福」「社会的幸福」を全否定するカルト

カテゴリ	事件
IS	異教徒の殺害と奴隷化、自爆テロを継続中
オウム真理教	地下鉄サリン事件(27人殺害)
	11400人の信者に、宗教的至福に至った者、多数
	現在も、1650人が、後継の「アレフ」「ひかりの輪」で活動継続
(旧称)統一教会	「世界平和統一家庭連合」と改称して活動継続
	2015年までに、被害総額1172億円の霊感し商法を実施
	7000人を越える日本人女性が集団結婚

もはや、「ウェルビーイング製造装置」の枠外

オウム真理教がテロリスト団体であったことは疑いようありませんが、いまだに死刑執行された教祖の教えに従って、1650人もの信者が活動を継続していること(参考)は、ウェルビーイングの観点からは語れるものではありません。

旧称統一教会のやってきたことが、テロリズムであるかどうかは読者の皆さんの判断に任せるとしても、高額献金、霊感商法、詐欺的教団勧誘、出産前養子縁組(筆者のブログ)、2世信者問題 ―― は、どう考えても、反社会的で反道徳的な行為です。これもまた、ウェルビーイングの枠外と言えるでしょう。

今回の調査と分析および考察は以上です。

□

今回のテーゼの一つである、「なぜ、世界統一家庭連合(旧称統一教会)の信者は、あんなに『幸せ』そうに見えるのか?」については理解できたものの、私は納得しているわけではありません(相変わらず不愉快です)。

一方、現実社会と調和のとれた宗教(×カルト宗教)が、ウェルビーイングの優れた製造システムであることは間違いなく、現時点でそれを否定する要素は見つかっていません。

私としては、宗教と並び立つ、別のウェルビーイング製造システムが登場して、それと宗教を選択できる世の中になって欲しいのですが ―― (カルトと同様に)現実社会とのインタフェースを無視したウェルビーイング製造システムとしては「飲酒」「喫煙」「ドラッグ」「ギャンブル」、その他の依存症くらいしか思い付きませんでした。

□

それでは、今回のコラムの内容をまとめてみたいと思います。

【1】本連載「お金に愛されないエンジニア」では、当初「お金を得る手段」についての検討からスタートしましたが、本来の目的が何であるかを、考え直した結果、「幸せなシニアのままで、最期に至るプロセス」こそが重要であることに、今さらながら気が付きました。

【2】そこで、幸せとは何かについて、2022年における最大の社会事件の当事者である「世界統一家庭連合(旧称統一教会)の信者」が『幸せ』に見えて、腹が立つ」という事実から出発して、この問題を考えることにしました。

【3】いわゆるカルト教団の行動原理を理解する方法論として『平面地球を信じる世界』を想定して、その中に、自分（江端）を置いてみる方法を提示しました。そして、カルト教団の信者からは、その教団の外側の全てが、サタン（悪魔）に見えるというイメージをシミュレーションしました。

【4】主観的幸福（Subjective Well-Being）に関する論文を精読し、「幸せ」というものが、主観的ルールのみによってのみ構成され、人間は自分の「幸福／不幸」を、自分で勝手に決めつけている、という事実を明らかにしました。また、「外出」というものが人間の幸せに貢献しているが、それは、「非日常的」な様相が必要であり、退職後の生き方として、「いろいろ考えないで、まずは家の外に出る。そして何かやれ。そんでもってそれを続けろ」が、一つの方法であるという結論に至りました。

【5】「主観的幸福」の観点から、人々がカルト宗教にはまり、そこから抜け出せない理由の一つは、それが「幸せ」であるから、という（身も蓋もない）結論に至りました。またカルトであるか否かに関わらず、宗教は人間を幸せにする手段として有効な手段であることと、それに加えて、宗教は運命的に「テロを作り出す装置」でもあることを、ロジックと事例で示しました。

以上です。

教祖の立場で、寄附勧誘防止の新法律を考えてみる

さて、今国会で、旧称統一教会のような宗教団体の霊感商法や非常識な献金を防止する法律が、成立しました（[参考](#)）。

この法律の制定に関しては、最後の最後まで、政府与党と野党の間で「マインドコントロール」の定義について紛糾しました。実は、私自身も「マインドコントロール」を定義してみようと試してみたのですが、うまくできませんでした（[筆者のブログ](#)）。

ですので、アプローチを変えて考えてみることにしました。

—— 私（江端）が、カルト教団を運営する教祖の立場で考えてみよう

この立場で考えると、やはり、私も本法律の第三条の「配慮義務」に目が行きました。

第三条 法人等は、寄附の勧誘を行うに当たっては、次に掲げる事項に十分に配慮しなければならない。

一 寄附の勧誘が個人の自由な意思を抑圧し、その勧誘を受ける個人が寄附をするか否かについて適切な判断をすることが困難な状態に陥ることがないようにすること。

ふむふむ、では、この「配慮義務」の違反に関する罰則はどうなっているかな？と調べてみると、罰則はないようです。

また、第4条の禁止事項についても、寄付を取り消すことはできるけど、直接の罰則の対象にもなっておらず、内閣総理大臣の命令発令後の行為について、「一年以下の拘禁刑若しくは百万円以下の罰金」になる（第16条）と読みました。

なるほど、ならば、「命令発令前に、資産家を狙った一発勝負の寄附勧誘」を仕掛ければ、罰則から逃れられるな、と、ほくそ笑みました。

また配慮義務には、それぞれの家庭の経済状況などを配慮しなければならない、となっていますが、これは『きちんと、配慮しました』と言って、事前に適当な調査報告書もどきを作っておけば対処できそう —— など、姑息な脱法方法を考えていました。

逆に言えば、この第三条の「配慮義務」を、第四条の「禁止行為」に入れられると、相当厳しいと感じました。ですので、日本共産党の提出した[修正案](#)は、正直「困る」と感じました。

（1）『配慮義務』が『禁止』になっていること（事実上の『寄付の要請』の禁止）、と、（2）寄付金の資金調達の方法（生命保険を解約させるなど）まで具体的に記載されている点が、相当に痛いです。

ただ、今回成立した法律（×共産党案）であれば、カルト教団「江端教」は、ギリギリ運用していけると思います（両罰規定はあるけど、法人重課がないです）。

今後、この議論が行われず、他のカルト教団も目立たないように活動して、カルト教団同士、協力しあってうまく生き延びていく必要があるなあ、と実感しています。

それにしても、あのマヌケな旧称統一教会のせいで、信者の老後資産を食いつぶして運営しているわれわれカルト教団は、ひどい巻き添えを食いました。本当に腹が立ちます ([筆者のブログ](#))。

□

ところで、この「法人等による寄附の不当な勧誘の防止等に関する法律」の法人には、「学校法人」も入るのでしょうか？（“宗教法人”と限定されていない）

私、長女と次女の高校や大学入学時（そして、在学中も）に、寄付金に関する勧誘の手紙を何度も受け取りました。一口20万円くらいの、一般家庭には厳しい金額の寄付金の要請でした。

嫁さんが支払おうとしていたのを、『そういうのは、余裕のある家に任せろ。我が家には、そんな余裕はない』といって、止めたのを覚えています —— 結局、娘の在学中、一度も寄付金は払っていません。

しかしながら、寄付金を払わなければ、娘たちが学校で不当な取り扱いを受けることにならないか、と心配になったことも事実です（もし、娘が不当な取扱いを受けていることが明らかになったら、即、訴訟を起こして、コラムのネタにしてやる、とも思っていました）。

さて、この学校法人の寄附の要請行為は、本法律の第3条1項の、「寄附の勧誘が個人の自由な意思を抑圧し、その勧誘を受ける個人が寄附をするか否かについて適切な判断をすることが困難な状態に陥ることがないようにすること」に該当しないでしょうか？

入学前、子どもたちはもちろん、保護者同士相談する機会もありません。また、子どもが不利益を受ける可能性が『完全ではない』とも言えない状況です。これは、『寄附をするか否かについて適切な判断をすることが困難な状態』と言えるのではないのでしょうか？

というわけで、この法律の最初の適用例が「学校法人」で、内閣総理大臣がその学校名を公表する（第6条2項）というようなことになったら、なかなか愉快だろうなあ、などと考えていました。

「カルト信者の予備軍は、世の中にたくさんいる」

後輩：「江端さんの『”主観的幸福感”に驚いた』 —— というのが、よく理解できません。幸福が主観的である、というのは『当たり前』じゃないですか？」

江端：「そこじゃない。私が驚いたのは、主観的であるはずの幸福を、数値化して分析しようとする研究が、既に40年近くも前から存在していた、という事実だよ。

Paper	Outline	Others
McFadden 2001	Utility-maximization theory is the dominant account of how travel-related choices of activity	Doubtful whether utility derived in this way is a valid measure of travellers' satisfaction
Kahneman 1999	Subjective well-being (SWB) has been proposed as a measure of individuals' benefits in a number of domains	SWB started from the paper.
Diener and Suh 1997	SWB expresses individuals' cognitive and affective well-being, directly measured by means of reliable psychometric scales	
Diener and Seligman 2004; Diener et al.2009	SWB refers to overall life satisfaction , which is relatively stable over time	Growing interest in understanding how SWB is affected
Ettema (2010)	Study of changes in SWBs from changes in modes of travel and public transportation service levels.	SWBs may find a relationship with the travel context .
Diener (1985)	SWB is assumed to consist of (1) positive affect (PA) and (2) negative affect (NA) from direct experience, and the (3) cognitive component of satisfaction with life as a whole	
Stone (1999)	Emotional components (PA and NA) may be assessed by immediate self-report of specific emotions and moods	
Kahneman(2004) Schwartz(2009)	Assessments from memory of emotions associated with recent activity were highly correlated with the results of the immediate method	Measure past emotional SWB (e.g., how you felt last week, how you feel overall) or current mood (how you feel now)
Diener(1985) Pavot & Diener (1993)	Cognitive SWB is assessed by a 5-item life satisfaction scale.	

コンビニの本棚に並んでいる、『幸せになるためのたった3つの方法』などといったような、データの一つもない著者の主観をほえつらねただけの本ではなく、膨大なデータと分析に基づき、科学的なアプローチで、客観的に「主観的な幸福感」の研究がされ続けてきた、ということを知って、本当にびっくりしたんだよ」

後輩:「ああ、そういうことでしたら、理解できました。加えて、この話(主観的幸福感)は大変勉強になりました」

□

後輩:「今回、私が感心したことの一つは、仏教、ヒンズー教、および東アジアにおける宗教が、教義を離れて日常生活の基盤として取り込まれている、という指摘ですね」

江端:「国際的に評価が高いと言われている(のかな?)わが国の治安は、神道や仏教によって暗黙的に維持されている、とも言えるかもしれないなあ*)」

*) 江端のお勧めはコチラの2冊です → 「[もぐらと奈加ちゃんが「日本人のヘンな習慣」について考えてみた。](#)」「[もぐらと奈加ちゃんが日本の神様にツッコミ入れてみた](#)」

後輩:「そうですね。神道については、明治政府が大日本憲法を制定するために、『国家神道』というようなものを作上げて、それが"戦争の道具"として使われたことからネガティブイメージがあるけど、そもそも神道や仏教は、意識されないレベルで『法律』と同格ですからね」

江端:「ある意味、イランや、アフガニスタンのタリバンのようなイスラム法による政教一致よりも、わが国の方が、ずっとスゴいかもしれない」

後輩:「仏教を信仰していた厩戸皇子(聖徳太子)の有名な『和を以て貴しとなす』を、現代風に言い換えれば『"同調圧力"バンザイ』ってことですからね」

江端:「それはそうと、今回、『宗教とウェルビーイング』について書いていたのだけど、『カルトとウェルビーイング』について、日本語の論文サーチ(by Google Scholar)をやってみたのだけど、文献数が少なくて、びっくりしたよ」

後輩:「あのね、江端さん。江端さんは、『カルトって、もしかしたら幸せじゃね?』というテーマの論文を、採択して掲載することが出来る学会が、日本にあると思いますか?」

江端:「いやいや、学問は、世俗や権力から独立して存在するものなのだから……」

後輩:「そこが江端さんの、甘い認識ですよ。『カルトって、もしかしたら幸せじゃね?』は、どう考えても、人文科学の領域です。人文科学研究のスポンサーと言えば誰ですか?」

江端:「少なくとも民間企業ではないな。とすれば、……政府、文部科学省、…… ああ、『国』?」

後輩:「そう、人文科学のパトロンは『国』だけです。人文科学領域で食っていきたいければ、国に忖度(そんたく)する研究にならざるを得ません。自由な研究がしたいければ、中世ヨーロッパあたりであれば、貴族に保護してもらおうとか、あるいは、自分自身が不労所得者でもない限り、不可能です」

江端:「そういえば、『種の起源』を執筆したダーウィンって、たしか、金持ち一族の不労所得者だったっけ? 民衆(特にキリスト教徒)や国家からディスられても全く構わない、という立場でもない限り、“進化論”などというパラダイムは唱えられないよな」

後輩:「私たちエンジニアの分野では理解しにくいのですが、人文科学などの場合、日本にいくつかある「〇〇大学の△△先生の考え方」というカテゴリーに属していないと、そもそも学術論文を受理してもらえない、という事情などもあるようです」

江端:「スクール(派閥)……だねえ。私たち、本当に好きだよな、“派閥”」

後輩:「ところで、『カルトとウェルビーイング』の話に戻りますが、これ『カルト』というより、既存の宗教、特に、仏教界に問題があると思うんです —— これ、実際に、私が京都にいたときに仕入れた情報なのですが、『今、20～30代のお坊さんたちは、スゴい危機感を持っている』そうです」

江端:「なんで?」

後輩:「今や、仏教は、葬式、お盆、命日のイベントメーカーとしてしか機能していなくて、本来、人々の心のケアを行うシステム(カウンセラー)としての仕組みが消えつつあるからです。本来、宗教の目的は、人々の心の救済 —— 江端さんの主張する『ウェルビーイングの維持・向上』 —— ですが、もう、この機能として、アテにされなくなっている、のです」

江端:「なるほど。それが、あの『職名だけの”スクールカウンセラー”^{*1)}』や『こころの電話相談室』に移行している、と。だけど、あれって、有意な成果があがっているかどうかは、分からないぞ^{*2)}」

*1) この『職名だけの”スクールカウンセラー”』の話については、いずれどこかで話をさせてください。

*2) ざっくり調べましたが、データを見つけられませんでした。

後輩:「いずれにしても、仏教が、その役割から除外されているのは事実のようです。若いお坊さんたちも、いろいろと努力されているようですが —— カルトの方が一枚上手、というのも事実なのです」

□

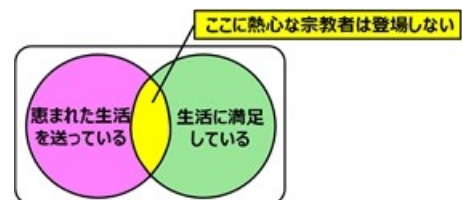
後輩:「今回のコラムのこの図を見ていて、[このツイッターのセリフ](#)『実生活で愛されて満たされてる女はSNSに自撮りなんてアップしない』を思い出しました」

江端:「これは……『SNSは、カルト宗教の一態様』という理解でいいのかな?」

後輩:「というよりは ——

『カルト宗教信者の予備軍が、世の中に、こんなにもたくさんいる』

ということの証左と考えるべきだと、私は思います」





Profile

江端智一（えばた ともいち）

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈（しれつ）を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣（しんらつ）な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[こぼれネット](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

Copyright © ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

